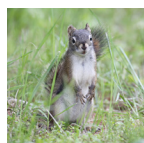


人的交流がつなぐ学術の未来

— 大阪大学大学院理学研究科と国立中山大学理学院による日台連携の深化 —



海外交流

久保孝史*

Connecting People, Shaping the Future of Science

— Deepening Japan-Taiwan Collaboration between the Graduate School of Science,
The University of Osaka and the College of Science, National Sun Yat-sen University —

Key Words: International Academic Exchange, Japan-Taiwan Collaboration, Joint Symposium

はじめに

2025年12月6日、台湾・高雄市の国立中山大学で、大阪大学大学院理学研究科と国立中山大学理学院による日台合同シンポジウムが開催された。両大学の教員・研究者・大学院生・学部学生あわせて約150名が参加し、日台の大学間における学術交流としても、ひととき大きなスケールの一日となった。会場では、数学、物理学、化学、高分子科学、生物科学など多彩な分野の発表が連なり、質疑は途切れることなく続いた。とりわけ印象的だったのは、若手研究者や学生が聴衆にとどまらず、議論の担い手として前に出ていたことである。専門や世代の垣根を越えて声が交わされ、研究の熱気が会場全体を包み込む時間が、終日続いた。

この充実した交流は、一朝一夕に生まれたわけではない。背景にあるのは、この2年間で積み重ねられてきた人的交流と、教員同士の信頼の層の厚みである。本稿では、その始まりから、DDP(ダブル・ディグリー・プログラム)協定締結、さらには合同シンポジウムに至る具体的な歩みを振り返りたい。

交流のきっかけ

両大学の交流の起点となったのは、大阪大学大学院理学研究科名誉教授・笠井俊夫先生が国立中山大学の客員教授に就任されたことだった。現地で研究者と日々向き合うなかで、笠井先生は個別の共同研究にとどまらず、組織として連携する意義を強く実

感されるようになったという。

その思いは具体的な提案へと結実する。2023年12月18日、笠井先生から筆者に対し、理学研究科と国立中山大学理学院の学術交流協定締結が提案された。翌年2月28日には笠井先生が筆者の研究室を訪問され、今後の交流の方向性について意見交換を行った。その場で筆者が大阪大学のDDPを紹介したところ、笠井先生は強い関心を示され、その内容を国立中山大学理学院長のJyh-Tsung Lee教授へ共有された。Lee理学院長もまたDDPの教育的意義に深い関心を寄せ、ここから両大学は、DDP協定締結に向けた検討を本格的に進めることとなった。研究交流が教育連携へと自然に接続されていった点に、本取り組みの特徴がある。

DDP協定締結に向けた具体的取り組み

DDP協定の締結には、両大学の教育制度や学位規程を踏まえた協定書を整備する必要がある。制度の骨格が同じでも、運用・表記・責任範囲は大学ごとに異なる。だからこそ、内容の調整を、責任をもって担う担当者を双方で定め、丁寧にすり合わせる事が不可欠となる。理学研究科では、これまで多数のDDP協定書作成に携わってきたLuca Baiotti准教授が担当者として指名され、国立中山大学側の責任者と綿密な協議を重ねた。規程と実務の両面を細かく確認し、合意できる形へ落とし込む作業を積み重ね、約5か月を経て協定書が完成した。

そして、協定書の完成後、国立中山大学においてDDP協定の調印式が執り行われた。近藤研究科長をはじめとする理学研究科の教員6名が現地に赴き、両大学間の教育連携は正式な制度として動き出した。教員の信頼関係を土台に、学生の学びを支える新たな枠組みへと発展したことは、今後の交流の広がりを示す大きな節目となった。



* Takashi KUBO

1968年5月生まれ
大阪大学大学院 理学研究科 化学専攻博士
後期課程(1996年)
現在、大阪大学大学院 理学研究科 化学専攻 教授 理学博士
TEL: 06-6850-5384
E-mail: kubo@chem.sci.osaka-u.ac.jp

日台学術合作「NSYSU x UOSAKA Science Joint Symposium」の開催

こうした準備と制度整備を経て、2025年12月6日、国立中山大學理学院において日台学術合作「NSYSU × UOSAKA Science Joint Symposium」が開催された。大阪大学からは理学研究科の各専攻より教員14名、学生15名の計29名が参加し、国立中山大學側からは教員・学生あわせて約120名が出席した。会場は朝から夕方まで熱気に満ち、日台の研究交流の厚みを実感させる一日となった(図1)。



図1 合同シンポジウムの集合写真。最前列左から2人目が笠井俊夫先生。右から2人目がLee理学院長。

シンポジウムでは、教員が口頭発表で最新の研究成果を紹介し(図2)、学生はポスター発表を通じて自らの研究をアピールした。発表と質疑応答はすべて英語で行われ、ポスター前では学生同士が臆することなく議論を交わす姿が随所で見られた。「英語で話す」こと自体が目的なのではなく、「研究の中身でぶつかり合う」空気が自然に立ち上がっていた点が印象深い。

とりわけ注目すべきは、国立中山大學理学院の研究の多くが、物質や現象の本質に迫る基礎科学を重



図2 教員による口頭発表。

視しており、大阪大学理学研究科が掲げる研究理念と高い親和性を有していたことである。共通の価値観がすでに共有されているからこそ、DDPを核とする教育連携が、共同研究という次の段階へ円滑に展開していくことを強く予感させる内容であった。

海外でのシンポジウムにおいて常に課題となるのが、移動および滞在にかかる経費である。今回は、渡航費を大阪大学大学院理学研究科が、滞在費を国立中山大學理学院がそれぞれ支援する形で実施された。両大学が本交流を単なる訪問行事ではなく、重要な学術活動として位置づけ、強い意志をもって支援していることを象徴する体制であった。

シンポジウム終了後には、大学近隣のレストランで懇親会が開かれた。台湾料理や台湾産ウイスキーを囲みながら、研究の話題にとどまらず、学生生活、研究室運営、将来の進路や研究計画まで、話は尽きなかった。さらに国立中山大學の学生による演奏会も披露され、初対面の緊張がほどけていくのが分かる、温かな時間となった。



図3 (左)開会の辞を述べられるLee理学院長。(右)楽器演奏をする国立中山大學の学生。

合同シンポジウム2日目には、交流行事の一環としてエクスカージョンが企画され、小琉球(Xiaoliuqi)でシュノーケリング体験が行われた(図4)。大阪大学と国立中山大學の教員・学生がともに海に入り、大学内とは異なる環境で同じ時間を共有したことは、互いの距離を縮め、学術交流を支える人と人との信頼関係をさらに深める契機となった。非日常の経験をともにすることが、継続的な国際連携を育むうえで確かな土台になり得ることをあらためて実感させる機会でもあった。

結び

本取り組みは、合同シンポジウム開催という一つの到達点にとどまらず、すでに次の成果へと結実し



図4 シュノーケリングを楽しむ教員と学生

始めている。これまでの継続的な交流を背景に、国立中山大学理学院からはDDPに基づく博士後期課程学生3名が大阪大学大学院理学研究科へ入学することが決定している。人的交流が具体的な教育成果として形になりつつあることは、本連携の確かな手応えを示すものである。

さらに、第2回の合同シンポジウムを大阪大学で開催することも予定されている。第2回では、国立中山大学の教員・学生が大阪大学を訪問し、理学研究科が展開する研究活動や最先端の研究設備を現地で直接体感する機会を設ける予定である。互いの研究環境への理解を一層深め、共同研究の具体的な接点を拡充することで、日台間の研究交流をさらなる発展へと導くことを目指している。



図5 合同シンポジウムのパンフレット。国立中山大学は、海辺にほど近い場所に位置し、美しい夕日を望むことのできる、自然に恵まれた穏やかな環境の中で研究に打ち込める大学である。

研究は、成果そのものだけでなく、それを生み出す人と人とのつながりによって加速する。制度として整え、実際に往来し、同じ場で議論し、次の世代が動き出す。その循環が回り始めた今、両校の連携は、より大きな広がりへ向けて新たな段階に入ろうとしている。

